



日本一大きな上円下方墳

山王塚古墳

山王塚古墳にみる東アジア的要素と、東国的な要素

山王塚古墳に見る広域的なつながりの要素として、まず挙げられるのは、版築工法^{はんちく}です。これは畿内の終末期古墳（飛鳥時代の古墳）の墳丘構築法そのものが導入されていると考えられます。また、古代中国思想の「天円地方の観念」^{てんえんちほう}の応用である上円下方墳が近畿以東に広域に分布する事実は、広域の首長同士の関係を表すものです。そして、版築工法により基壇^{きだん}を作り、その上に石室を組み上げている様は、韓半島南部の古代寺院建築工法の適用と考えられます。

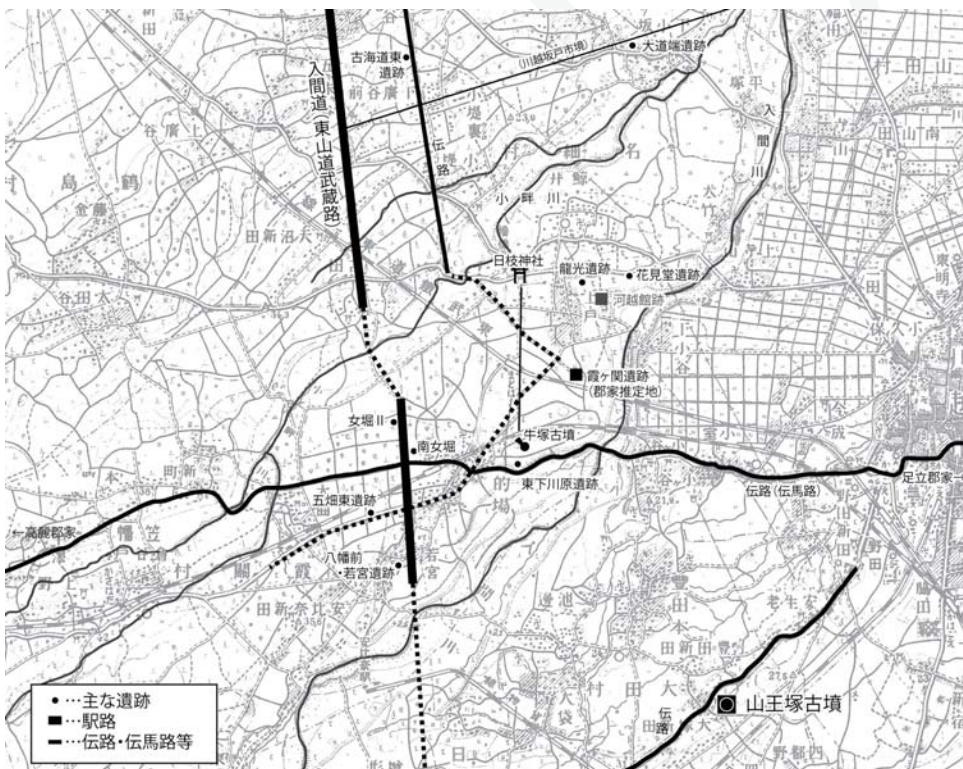
一方で、墳丘の小型化が著しい終末期古墳にあって、山王塚古墳では大きさに強い拘り^{こたわ}が見て取れる点は東国的な在り方を示しています（畿内ではすでに古墳は小型化しており、事実、終末期古墳最大の方墳は千葉県^{りゅうかくじいわや}の龍角寺岩屋古墳、円墳は栃木県^{みぶくるまづか}の壬生車塚古墳です）。また埋葬主体部は、ハの字状に開く前庭部^{ぜんていぶ}と門柱石^{もんちゅうせき}を持つ胴張複室構造^{どうはりふくしつこうぞう}の横穴式石室であり、在地的な様式に復元されることから、在地首長としてのアイデンティティを読み取れます。石室使用石材の角閃石安山岩は旧利根川流域から、緑泥片岩は荒川水系の採取可能地から搬入されており、これらは有力首長の勢力範囲を示しています。

これらのことから、山王塚古墳は東アジアの要素と東国的な要素が共存する稀有な古墳であり、7世紀日本古代史の解明に貢献しうる貴重な史跡といえます。

被葬者は誰なのか

7世紀第3四半期以降、中央政府の命令で古代道路・東山道武蔵路^{とうさんどうむさしみち}が敷設されました。川越市域では山王塚古墳の西2.5kmの距離に、南北の軸で走っていました。続く奈良時代（8世紀）には霞ヶ関遺跡（上戸新町）に入間郡家（役所）が置かれ、交通の要衝となった川越市域には、後に中世武士・河越氏が居を構える（国指定史跡・河越館跡；上戸）など地域の中心的な場所となっていきます。

東アジア的要素と、東国的な要素を兼ね備えた山王塚古墳の被葬者の人物像を考える時、ほぼ同じ時期に行われた国家プロジェクトである東山道武蔵路の建設事業と無関係であったとは考えられません。東山道武蔵路の開削に尽力した在地首長が、山王塚古墳の被葬者と考えられます。



はじめに ～ 山王塚古墳とは ～

山王塚古墳は7世紀（飛鳥時代）の第3四半期（西暦651～674年）に築造された国内最大の上円下方墳^{じょうえんかほうふん}です。発掘調査で墳形が確認された事例としては6例目です。古墳の総数は17万基超ともいわれていますので、その希少性は明らかです。令和5年3月20日に国の史跡に指定されました。

これまでの発掘調査の成果からは、被葬者の広域的なつながりや東国における立ち位置など様々な情報が読み取れることから、日本古代史を考えるうえでの示唆に富んだ歴史的、学術的価値を有する史跡といえます。

築造過程 ～ 山王塚古墳ができるまで ～

古墳は旧地表面を整地した後に、①上円部 → ②下方部・周溝の順で成形されました。

①上円部

まず、周辺を深く掘り大量の関東ローム（＝赤土）を採掘します。そして、ならした地表面の上に、関東ロームを版築工法^{はんちく}（土を一層ずつ杵などで突き固めて強固な構造物を造る方法）で突き固めながら上円部を積み上げていきます。その際、墳丘の中心から南側にかけて（石室を組む場所）は、表土の黒ボク土を取り除いた後に関東ロームで高さ1.8mの基壇状の盛土を造り、その上に石室を組み上げるとい、大変珍しい工夫をしています。

②下方部・周溝

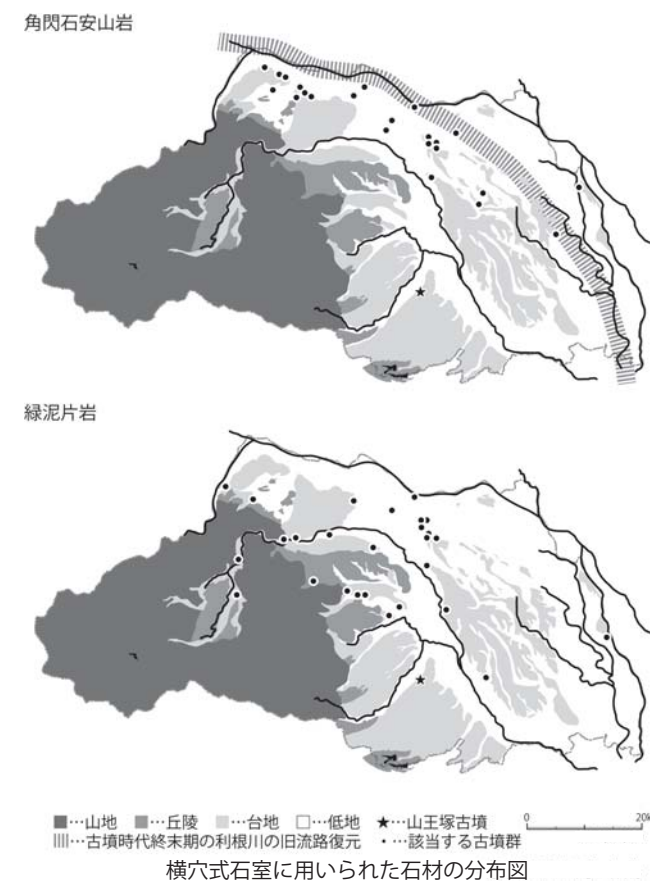
上円部の築造後は、周辺にできた採掘坑を埋め戻しながら、下方部と周溝を成形します。

まず、下方部の縁辺部に区画を作るように四角く土手状の盛土を造り、これと同時に周溝の底面を整えます。その後、上円部と土手状盛土との間を埋めるように水平に盛土をします。

このようにして、山王塚古墳ができ上がりました。

埋葬主体部 ～ 山王塚古墳の中は ～

発掘調査では石室の壁の一部や礎敷^{れきしき}の床面を検出しました。またレーダー探査の結果を合わせて考えると、全長15mで、石室は膨らみを持つ形^{どうはりがた}（胴張形）の玄室を持つ複室構造^{ふくしつこうぞう}の横穴式石室と復元されます。これは飛鳥時代、武蔵地域の有力首長墓（武蔵府中熊野神社古墳など）に採用されたものと同じ型です。側壁に使われた角閃石安山岩^{かくせんせきあんざんがん}は本庄市～深谷市の利根川河川敷、門柱石に使われた緑泥片岩は小川町^{ねがわ}梶が川流域で採集されたと考えられます。

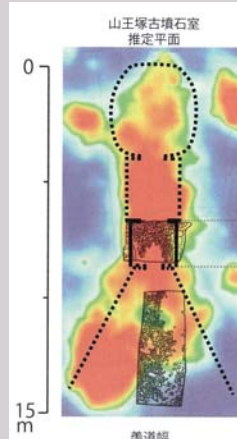


山王塚古墳 史跡見学の見どころ

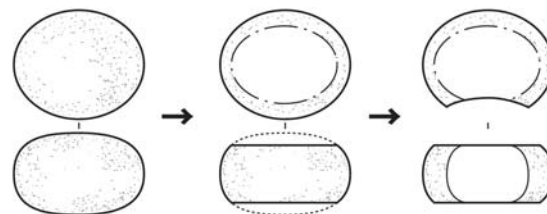
～埋葬主体部～

ハの字状に開く前庭部の奥に、縦に3部屋が連なる複室構造の横穴式石室が造られました。全長15mですので、鳥居をくぐったすぐ辺りから、山王社が安置されている場所位までの長さです。

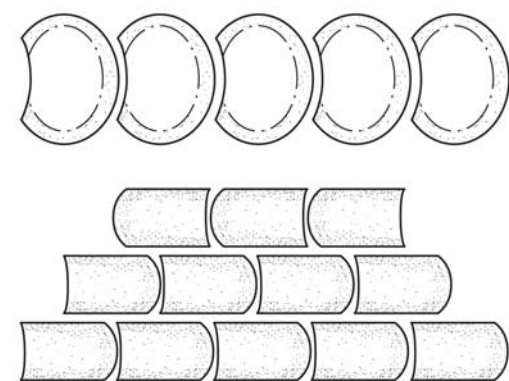
レーダー探査結果



側壁に用いられた角閃石安山岩の石材加工模式図



側壁の小口平積復元模式図



～上円部墳丘盛土～

採掘した関東ロームを大量に使い、高さ5mの墳丘盛土を版築工法で積み上げています。

～土手状盛土～

下方部の縁を見ると、高く盛り上がっています（土手状盛土）。上円部を積み上げた後、下方部を造る際に周辺を土手状に四角く区画し、最後に上円部と土手状盛土の間を埋めるように土を入れて墳丘が完成しました。

《山王塚古墳 基本データ》

★築造時期
7世紀第3四半期（西暦651-674年）

★規模
上円部 直径37m
下方部 一辺69m
墳丘盛土 高さ5m
周溝を含めた一辺90m

★埋葬主体部
横穴式石室（胴張形複室構造）全長9m
ハの字状の前庭部 全長6m

★出土遺物
鉄釘
ガラス小玉
東海地方産須恵器（フラスコ形長頸壺、平瓶）

～周溝～

窪んでいるところは、周溝の痕跡です。幅10m、深さ1m程の周溝が周囲を巡っていました。周辺の発掘調査の成果から、今見えているよりも幅広い周溝であることがわかりました。

～土橋～

山王社への参道は周囲よりも高くなっています。これは、古墳の内外の出入り口として周溝の一部を掘り残した土橋です。つまり、古墳の出入り口が、のちの山王社への参道に引き継がれています。

～山王塚西古墳～

かつては墳丘が残っていたそうですが、大正時代の開墾で削られてしまいました。平成4年に調査され、勾玉や鉄剣、甕などが出土しました（川越市指定文化財：考古資料）。



～周溝（正面）～

窪地は周溝の痕跡です。正面は特に幅広で、幅15m、深さ1m程の規模になります。

～起伏の誕生～

飛鳥時代の地表面はおおよそ現在の道路と同じくらいの高さでした。元々は平坦な土地でしたが、古墳が造られたことによって地形に起伏が生まれました。

～関東ローム採掘坑（大形土坑）の分布～

上円部の周りを大きく掘りくぼめて墳丘の材料である関東ロームを獲得しました。採掘坑は、下方部と周溝を成形する過程で埋め戻されました。

